

ふるさと 港町 吳

綾乃

私は、母の地元 吳市の港町、阿賀で生まれました。父は転勤族で、吳に落ち着いたのは中学入学時。それまでは、広島、山口、松山、高松と中四国を転々としてきました。見知らぬ地で、知らぬ校歌を歌い、吳弁も通じず、人とのつながりを作っては別れるというのは複雑でした。子供心に「ふるさと」という言葉も浮き草のような感じがあり、盆正月に母の実家で祖父母たちに会うのが安らぎでした。就職を機に広島市内に住み、クレアラインを運転して身内や友人に会い、町も変わり人も年を経るなかで、私の心のふるさとはやはり吳の思いが強く残っていたある日、灰ヶ峰に登ると、吳、広島や、島々、遠くは四国まで見渡せ、ふるさとが第二、第三とあると思うのも良いように感じました。

故郷は燕の空の広がりて

「灰ヶ峰鏡と仰ぎ」四十の夏

新緑の灰ヶ峰より里を見る

青き嶺登れば望め安芸と伊予

夏豆を窺る祖父母と妹と

汲み取りのホース跳び越え夏休み

篠笛にそつと口寄す祭の夜

子の羽織る吾の振袖盆の夜

父母が吾子に持たせる大きちぬ

磯の香の濃くも甘やか牡蠣打ち場

《作品鑑賞》

大畑 恵

綾乃さんは中学の時代までお父様の転勤で色々の土地を回られたとの事。大変だったと思いますが、それぞれの土地で新しい経験ができ、新しいお友達ができる、少しうらやましい気が致します。盆正月にお母さんの実家で過ごされた日が楽しかったのでしょうか。

汲み取りのホース跳び越え夏休み

一寸お転婆な女の子が目につかびます。

灰ヶ峰に登った時の句は、山の景色の美しさが伝わりません。

「灰ヶ峰鏡と仰ぎ」四十の夏

灰ヶ峰は故郷の吳、広島、瀬戸の島々、四国まで望める。それぞれが綾乃さんにとって色々な思い出に繋がるのでしよう。他の灰ヶ峰の句もとても臨場感があり、山を知らない私も目に情景が浮かびます。

私が微笑ましく読ませて頂いたのは、

子の羽織る吾の振袖盆の夜

お母さんの振袖を着て一寸得意げな娘さんと、それを見つめる綾乃さんの姿が浮かびます。

父母が吾子に持たせる大きちぬ

一番大きいちぬを選び、子に持たせようとしているご両親の姿が目につかびます。

故郷に繋がる思いと人との繋がりを大切にされている綾乃さんの句を鑑賞させて頂き、ほのぼのとした思いになりました。